

ジョン・デナムの翻訳論

——〈作品〉への予感——

大久保 友博

はじめに

17世紀の英国を生き抜いたジョン・デナム (John Denham 1615-1669) による二篇の翻訳論、「当訳の筆者に寄す」("To the Author of this Translation", c.1644) と「『トロイ陥落』序文」("Preface" to *The Destruction of Troy*, c.1654) は、翻訳史の上では重要なものとして扱われている。『ヘロドトスからニーチェまでの西洋翻訳理論』(Robinson, *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, 1997) や『翻訳——理論と実践：史的選集』(Weissbort, *Translation - Theory and Practice: A Historical Reader*, 2006) など、通時的なアンソロジーではよく収録されている上、研究や批評に限らず触れられることが多い。だがこのふたつの翻訳論の取り扱われ方については、やや問題があると言ってもいいだろう。ひとつには、ふたつの翻訳論がほぼ同一のものとして、それぞれの論の内容や態度が区別されずに読まれているということがある。またもうひとつの問題は、執筆の年代や書かれた当時の情勢、あるいはデナム当人の置かれた状況が考慮されずに読まれていることだ。本論では、これらの問題を解消することを主題とする。そして、ひとりの人間の人生と翻訳がどのような形でつながってくるのかを、翻訳論を読み解くことで明らかにしていきたい。

1 「当訳の筆者に寄す」の執筆背景

ジョン・デナムの名は、英文学上ではヒロイック・カプレットの風景詩『クーパーの丘』(*Coopers Hill*, 1655) で知られている。当人はジェントリ層を出自とし、裕福な郷紳の子によくあるように放蕩者であり落第者であった。父親が法曹界の要職につく地主であったため、家に地位相応の財産はあったと考えられるが、当人が金銭目当ての結婚をなし、父に放蕩癖をたしなめられ反省文を書かされるほどであったから、彼の浪費は周囲の目に余るものであったようだ。また公的な記録に残るデナムの名は、ほとんどが借金や負債にまつわるものでもあった。ゆえに、デナムが金に困って自らもなにがしかの地位について富を築こうと目論んでも、不思議ではない。

歴史学者のトレヴァー＝ローパー (Hugh Redwald Trevor-Roper 1914-2003) は、17世紀前半のジェントリにとって、宮廷に官職を得ることが社会的・経済的成功に決定的な要素であったとする。地代収入以上のものを確保することが重要であり、宮廷に入れず成り上がれなかった地方ジェントリと、一方で栄華を極めた宮廷ジェントリとの対立構造が、17世紀イングランドの内乱を生んだともされている (1953: 8-33)。

ところがデナムは、目立った政治的手腕や実務能力を有していなかった。通ったオックスフォード大学や法学院でもよい成績を残せず、そもそも修了すらしていない。デナムの学生時代において残っているのは、賭事に溺れる夢想的人物であることと、口とペンが立つことという、友人たちによるこのふたつの記憶である (O Hehir 1968: 7-16)。困窮した若き日の彼にとって、宮廷での出世に利用できるものと言え、文芸をおいてほかになかっただろう。

宮廷において、文芸とは何より社交と興の道具であった。儀式に必要なものとして、世辞や求愛・弔辞や祝辞の手段として、あるいは日常生活や事件について意見交換する媒体として、文芸が用いられていた。性質上余技と扱われることが多かったため、宮廷やその周辺で行われた文芸の流通は、基本的には小さなサークルのなかでの回覧にとどまるものであった。だが時には国家体制を確立させるもの、あるいは宮廷人の理想たる人文家を体現するものともされたため、文芸が出世の道となることもあった (Minor 1971: 86; Saunders 1964: 33-45)。

すぐれた文芸をなした者が、自らより上位の者に宮廷人と認められ、あるいは座に必要なものとして囲われ、官職を与えられる。スチュワート朝では宮廷の上位者から官職が乱発されるが (Trevor-Roper 1965: 68-71, 73-79)、とりわけ1630年代にはそれを得ようとする者たちが多数現れた。競争のなかでやがて詩は内的なものの発露や美の追求というより、小さな環境のなかで受け入れられるだけの特殊なものとなり、自己顕示と成り上がりの手段となる (Helgerson 1983: 29, 186)。デナムは『ペルシアの王』 (*The Sophy*, 1642) のプロローグで、金でも名誉のためでもなく他に何もすることがないから書いた、としているが (Denham 1642b)、前置きは当時の宮廷における印刷忌避の空気 (Saunders 1964: 52-58) や当人の個人的事情から疑うにしても、〈他にできることがないから〉という部分は信じてもいいだろう。

『ペルシアの王』が執筆・刊行された時期のイングランドは、主教戦争後で、国の乱れた責任をめぐって国王派と議会派が対立していた時期にあたる。その政治情勢から、詩は双方のイデオロギーを体現するものとなってい、この両者の闘争における武器ともなっていく (Wilcher 2001: 254)。最終的に国王の側近たるストラッフォード伯 (Thomas Wentworth, Earl of Strafford 1693-1641) が断罪・処刑されることになったが、デナムはその裁判に弁護側証人として出席していた。少なからず関係者であったデナムが、この折に伯の死を叙情的にとらえた詩 ("On the Earl of Strafford's Tryal and Death", 1641) を書いたことは、宮廷の意向に適ったものであったと考えられる。

有名な『クーパーの丘』の初期稿も同じ頃に書かれて回覧されていたが、よく知られている後の稿とは内容が異なっており、宮廷の興に沿った様式としての過度な政治性と過剰な表現が見て

取れるものとなっていた。さらに、ほとんどの詩が手稿の回覧によって流通していた当時において、この詩は印刷屋の名も著者の名も序文さえもなく無断出版と見まごうばかりの形で1642年に出版され、異例にも広く公に届き好評を得てもいる（O Hehir 1968: 21-25, 37-40, 49-51; Wilcher 2001: 131-133, 254）。宮廷の内と外での名声がデナムの出世を後押ししたことは想像に難くない。

イングランドが内戦に突入した1642年の秋、デナムは議会軍に対する守備隊としてサリー州（Surrey）の知事に任じられ、要地ファーナム城（Farnham）の主となるのだが、金策に走る以外の行動をほとんど取らないまま11月の攻防時に包囲されて易々と降伏、捕虜となり、せっかく得た地位もふいにしてしまう（O Hehir 1968: 55-61）。国王軍の退くオックスフォードに移動した宮廷へとデナムが戻ったのは翌年3月のことだった。

宮廷での名誉挽回を目指したデナムは、相変わらず賭事に溺れるかたわら、自らの文筆力を用いてプロバガンダを書き続けるのだが（O Hehir 1968: 62）、そのオックスフォードの宮廷でその頃流行していたのが、知的営みとしての翻訳であった（De Groot 2004: 67）。オックスフォード大学の風土に触れたからか、それとも戦期の気晴らしにより知的なものが選ばれたのかはわからないが、流行に乗ってその行為に勤しんだ人物のひとりが、リチャード・ファンショー（Richard Fanshawe 1608-1666）である。ファンショーはケンブリッジ大学を出たあと、若くして外国で学んだという語学力を買われて早々に外交官付きの秘書となり、42年頃から宮廷入り、44年には皇太子（Charles II 1630-1685）の戦時対策秘書となるエリートであった。そして47年10月にはチャールズ一世（Charles I 1600-1649）からスペイン使節に任命されるのだが、その経歴を考えても相当の出世株であることがわかる（Davidson 2004: 20-23）。

汚名返上をねらうデナムにとって、少しでも王室に近い人物にこびを売っておくのは損にならないことであっただろう。また宮廷の中核にいる人物をたたえるために書かれた詩は、国王の目に触れる可能性もあった。さらに、内戦突入後の宮廷文芸では、王を頂点とした〈称揚〉と〈連帯・共感〉のための作品が中心的に作られる傾向があった。同時に意図された相手に書かれることも多くなったため、宮廷サークルの閉鎖性が高まってもいた（De Groot 2004: 54-55）。ガアリーニ（Giovanni Battista Guarini 1538-1612）の牧歌的悲喜劇『忠実な羊飼ひ』（*Il Pastor Fido*, 1590）の翻訳をなしたファンショーに対してデナムが捧げた「当訳の筆者に寄す」という詩は、後年の回想から執筆年代は1644年もしくは1645年頃と推測されるが（Denham 1668a）、このような戦期の宮廷文芸の空気を強く反映したものである。

この翻訳『忠実な羊飼ひ』（*The Faithfull Shepherd*）とファンショーに寄せられたデナム作「当訳の筆者に寄す」が1647年に刊行されたのは、「印刷のステイグマ」（Saunders 1964: 67）として宮廷で長く忌避されていた書籍の出版が、40年代半ば頃から変化し始めていたことによる。それまで宮廷文芸は、親密な狭いサークルにおける軽薄な座興として外に出すことをはばかれていたのだが、基盤となる宮廷の置かれた状況が変わってしまったため、生まれる文芸もその変化の影響を受けざるをえなかったのである。理由のひとつとして、王権神授的な国王至上のイデオロギーを効果的に広めるため、オックスフォードに本拠を移した宮廷が印刷の力に頼り始めた

ことがある (Wilcher 2001: 3)。とりわけファンシヨアの翻訳『忠実な羊飼い』が当時なされた他の翻訳よりも刊行が早かったのは、原詩が牧歌であり、国のあるべき姿としての理想郷を通じて、王家のポリシーと結びつくものであったからだろう (Marcus 1994: 139-140)。そして王党派の標榜したロイヤリズムは、忠誠心の現れとして臣下に国家への一体化を求めるものであったため、表現が手稿によって揺れることを、思想の不安定を表すものとして嫌った。ゆえにイデオロギーの正当性と不変性を確保しようと、文芸に携わる王党派の面々は定着した〈印刷〉の形態を必要としたのである (De Groot 2004: 68-69)。

だが宮廷内の印刷に対する恥辱の感覚が薄らいだとはいえ、移行期として出版を意図する者はまだ慣習的に言い訳となるものを必要とした。多くの場合、周囲の好評や賞賛に促されてしぶしぶ出した、というような序文・序詩がつけられたり、捧げる対象として高位の者を引き合いに出したりなどして、自らの行為を正当化するのである (Saunders 1964: 57-58)。ファンシヨアの翻訳『忠実な羊飼い』に付されたデナムの「当訳の筆者に寄す」という詩も、まさに言い訳のためのものであっただろう。こうしてデナムの「当訳の筆者に寄す」という詩は多くの人の目に触れることとなり、ファンシヨアの訳書の度重なる再版や詩自体の再録もあって、後世に残ることになったのである。

2 詩と対象のずれ

この「当訳の筆者に寄す」はたった44行の短いもので、詩形としてはデナムがその『クーパーの丘』で名を馳せた得意のヒロイック・カブレットが使われており、一般的解釈としては、「逐語訳への強い敵意」(Amos 1920: 147)を持った「模倣という意味での翻訳を語る」(Hermans 1999: 100)ものとされる。すなわちカウリー (Abraham Cowley 1618-1667) と並べられ、「自由の翻訳術」(Ellis and Oakley-Brown 1998: 340)を述べるものと考えられたのである。その根拠とされるのが、後世よく引用される次の詩行である。

Such is our Pride, our Folly, or our Fate,
That few but such as cannot write, translate. (Denham 1647: ll.1-2)

That servile path thou nobly dost decline
Of tracing word by word, and line by line.
Those are the labour'd births of slavish brains,
Not the effects of Poetry, but pains.
Cheap vulgar arts, whose narrowness affords
No flight for thoughts, but poorly sticks at words.
A new and nobler way thou dost pursue

To make Translations, and Translators too.
 They but preserve the Ashes, Thou the Flame,
 True to his sense, but truer to his fame. (*ibid.*: ll.15-24, 下線部筆者)

この詩は、"thou" と呼びかけられる訳者ファンシヨウの巧みな翻訳手腕を褒め称えるものであるが（原著者は "he", "his"）、この箇所だけを見れば、ここにあるのはいわゆる逐語訳と釈意訳の対立であり、デナムはファンシヨウを後者に値するものとして擁護しているようにも思える。さらに踏み込んで、釈意訳を王党派、逐語訳を議会派——とりわけトマス・メイ（Thomas May 1594-1650）——に見立て、政治的な揶揄として読む説もあるが（Davis 2008: 19）、これはかなり穿ちすぎの解釈であり疑わしい。なぜなら、その説の根拠として持ち出されるのがデナムが1668年の著作集の序文に記した回想で、チャールズ一世がこの詩を読んで気に入ったという箇所なのだが、そこに書かれたエピソードでは、〈政治に差し障るため詩作をやめるようにとデナムが国王にやんわりとたしなめられたこと（および、このようにたしなめられるほど自らが内戦期に王室から大事なつとめを仰せついていたという過去の栄光の自慢）〉が記され、むしろこの詩が政治的に役に立たないものであると強調されているからである（Denham 1668a）。また、そもそもメイはファンシヨウと親友同士であり、王党派・議会派と立場は違えど互いに議論し合える仲であったから（Norbrook 1994: 63-64）、ファンシヨウ本人が親友への揶揄を行った詩を認めて自らの本の序詩に選ぶとは考えがたい上、この詩自体に特定の個人を差す要素がまったく見受けられない。確かにこの詩では、ファンシヨウが〈賢明にも行わなかったこと〉として、否定的な翻訳者像が描き出されており、また冒頭二行に続いて筆力のない者や言葉遣いに品のない者が貶されてはいるのだが、直接的な名指しがなされているわけではない。また、当てはまりそうな者を挙げるならば、メイ以外にもホリデイ（Barten Holyday 1593-1661）のような人物が宮廷にも存在していたことを忘れてはならないだろう。

しかし〈賢明にも行わなかった〉のであれば、その行為以前に〈愚かにも行ってしまった〉ものがあると考えるのは当然だ。そして翻訳の場合ならば、新訳と旧訳の関係に思い至るのが通常の論理的帰結だろう。事実、このファンシヨウ訳が刊行されたときの扉頁には「原典から今新たに訳された」と記されているのであるから、むしろより古いものが存在するはずであり、実際のところ原作発表（1590年）の12年後に同作品の初訳が出ている。この原作たる『忠実な羊飼』は、理想郷アルカディアでの人間と妖精の恋愛模様を描いたものであり、決まった韻律を持たない詩であるため節に乗せやすく、その形式の特異性のため発表当初より物議を醸しつつも17世紀を通して盛んに音楽を付けられた作品である（Parker 1994: 4-6）。ところが初訳（Dymock 1602）では、全編をブランク・ヴァースで統一しているため、自由で音楽的な緩急は失われており、確かに非難されるところがありそうとも言える。デナムの詩の他の箇所にも、ファンシヨウ訳が陥らなかった誤りとして、こう書かれている。

Nor fetter'd to his Numbers, and his Times,
 Betray'st his Musick to unhappy Rimes,
 Nor are the nerves of his compacted strength
 Stretch'd and dissolv'd into unsinnewed length: (Denham 1647: ll.29-32, 下線部筆者)

原詩の各行の韻律や音量は可変的であるが、これを全編ブランク・ヴァースという決まった歩格に統一してしまうと、訳では短い簡潔な詩行は存在しなくなり、場所によっては平板で間延びした印象を与えることもあろう。その意味では訳詩が原詩の音楽性を不満足な韻律に縛り付けてしまっていると言えるし、デナムの着眼点も妥当であるように思える。ところが転じて実際のファンシヨー訳を見てみると、詩形はヒロイック・カプレットが選ばれており、やはり定律の韻文なのである。しかもブランク・ヴァースと同じ五歩格であるから、その音量に差はない。ファンシヨーの方が言葉の選び方がややゆるく装飾的だと言えるが、行数などは変則的な詩を定型詩に訳す以上ある程度変化して当たり前であるし、デナムの言う言葉の選択についても、以下のように初訳もファンシヨー訳もそれほどの逸脱は見られず、中核になる単語や骨格をほぼそのままなぞった上で、音調に合わせて増減を行っている。

Go you that lodg'd the Monster, as y'are wont
 Amongst the neighb'ring sheepcoats, raise the Hunt.
 Rowse eyes and hearts with your shrill voice and horn;
 If ever in Arcadia there were born
 A shepherd, who did follow Cynthia's Court
 As a true lover of her rurall sport,
 Within whose Quarry-scorning mind had place
 The pleasure or the glory of the Chase,
 Now let him show that courage and that love,
 By following me, where in a little grove
 To Valour a large field doth open lye,
 That dreadfull Boar, I mean, that Prodigy
 Of Nature and the Woods, that huge, that fell, (Fanshawe 1647: S.1, A.1, ll.1-13)

Go you that haue enclos'd the dreadfull beast,
 And giue the signe that's vsuall to our hunting,
 Go swell your eyes and harts with hornes and shoutes,
 If there be any swaine of Cinthia's troupe
 In all Arcadia, delighted in her sports,

Whose generous affects are stung with care,
 Or glory of these woods: let him come forth
 And follow me, where in a circle small
 (Though to our valure large) inclosed is
 The ougly Bore, monster of nature & these woods. (Dymock 1602: S.1, A.1, ll.1-10)

こうして比べてみると、ファンシヨーも初訳と同様に単語を追いかけており、そして初訳以上に訳詩を引き延ばしている。ふたつの訳詩における翻訳の指針がほぼ変わらないのであれば、初訳に比べてファンシヨーの訳に「新しく高貴な道」と言えるほどの斬新さがあるかどうか、疑問を抱かずにはいられないだろう。

事実、18世紀末の批評家タイトラー (Alexander Fraser Tytler 1747-1813) は、デナムの激賞に異を唱えている。比較的出来の良い部分として彼の挙げている箇所も、いくつかの語が語調や韻律に合わせて意味を増幅させるように付け加えられているだけで、この当時でもしばしば見られる手法であり、それ以上のものではない。またタイトラーはファンシヨーの訳詩の位置づけについても、逐字訳者と断ぜられることもあるメイやサンズ (George Sandys 1577-1644) と並べた上で、彼らの方がより翻訳の自由を実行していたとする (Tytler 1813: 74-77)。実際このふたりをどこまで逐字訳の追従者と取るかは微妙なところで、サンズは原詩と訳詩の行数を合わせるとはいえ音量を横に引き延ばすことはせず、訳行に収まりきれない言葉を徹底的に省いていくことでラテン語の簡潔性を再現しようとした。一方でメイで特徴的なのは中間休止への異常なこだわりで、個々の文章の長さや組合せを変えてでも、彼は詩行の構成のなかの同じような位置に中間休止を刻もうとする。両者は何かひとつにこだわるためにそのほかの部分を徹底的に自由にするとも言えて、ゆえに単なる逐字訳・逐行訳の範囲には収まりきれないところがある。

ところがファンシヨーには何ら特色ある自由やこだわりがなく、デナムが彼の何を褒めようとしていたのかが見えてこない。当の訳詩と捧げられた「当訳の筆者に寄す」を並べてながめてみたとき、やはりどうも噛み合わないものがあるのだ。

3 表現の裏にあるもの

「当訳の筆者に寄す」の内容に対応するものがファンシヨー訳『忠実な羊飼』にないとするれば、やはりこの献詩自体を宮廷における単なる追従や世辞の類と考えるのが無難なのだろうか。しかしながら、デナムの勝手な妄想だけからこの詩の表現が生まれたとは考えがたい。むろん、題材への密着を廃して言葉を紡ぐ、という言説自体は翻訳にありふれているが、「当訳の筆者に寄す」という詩の具体的表現と直接に結びつくわけではない。翻訳論を読む際に大事なのは、筆者の態度を逐語訳か釈意訳かと分類することではなく、当人が語ろうとしていた翻訳 (作品・行為) とは何であったかを考察することだ。

デナムの用いる言葉から、フランス翻訳論の影響——とりわけ「翻訳は不実な美女」と論じたことで有名な有名なダブランクール (Nicolas Perrot d'Ablancourt 1606-1664) の存在を持ち出す向きもあるが (Brooks 1949: 131; T. R. Steiner 1975: 22-25; Venuti 1995: 39-41, *et al.*)、諸氏が根拠とするのは、イングランドを追われた亡命時の王党派がパリに滞在していたことのみであり、まともな確証はない。また、そもそもこの「当訳の筆者に寄す」を書いた時点では、デナムはまだフランスにすら行っておらず、後述するように亡命時のデナムはパリのルーヴル派 (Louvre) でなくチャールズ二世 (皇太子) のいるハーグ派 (Den Haag) に属していた (O Hehir 1968: 83-84, 96; Wilcher 2001: 317)。ならば、ここであるかどうかともわからない外的な影響関係や規範を探求するより、デナム本人の経験のなかへ表現の動機を求めた方が正当である。事実、執筆当時のデナムには翻訳の経験があった。学生時代にウェルギリウス (Publius Vergilius Maro 70 BCE-19 BCE) の『アエネーイス』 (*Aeneis*, 29 BCE-19 BCE) のいくつかの巻と向き合っており、その結果生み出された詩も小さなサークルのなかで回覧されていた。

後年それは改訂されて一部分が出版されるが、そのときの記述によれば取り組んだのは1636年、デナムが21歳のときだ。そして正確に言うならば、彼の行為は一般的に想定される〈翻訳〉よりもむしろ〈翻案〉の方に近い。デナムは原詩の筋やイメージを源泉としてヒロイック・カブレットの長詩を習作したのである。この初期訳の検討がその翻刻とともに近年行われたが (Sowerby 2010: 23-31)、たとえば次に示す箇所を見ると、デナムは細かな字面といったものに囚われていないことがわかる。

It thundered, and falling from the skies
Through the thick shade a fiery meteor flies,
And as it passed a flaming furrow shined,
And a sulphurous stench remained behind. (Denham 1636: v.2, ll.513-516)

[...] subitoque fragore
intonuit laeuum, et de caelo lapsa per umbras
stella facem ducens multa cum luce cucurrit.
illam summa super labentem culmina tecti
cernimus Idaea claram se condere silua
signantemque uias; tum longo limite sulcus
dat lucem et late circum loca sulphure fumant. (Mynors 1969: v.2, ll.692-698)

続いて引いた原文は、内容として「[...] 突然の轟音とともに／左手に雷鳴が鳴り響き、天から暗闇の中を一つの星が／流れた。おびただしい光の尾を引いて走りつつ、／この星が館の高い頂の上を流れるのを／われわれは目にする。輝きをイーダの森に隠すまで／道筋を示していた。こ

のとき、軌跡は長い筋を引いて／光り輝き、あたり一帯に硫黄の煙が立ち込める。」(岡・高橋 2001: v.2, ll.692-698) となるところなのだが、引用した詩行では状況と雰囲気はそれなりに伝わるものの、描写の構成がまったく違っている。デナムが学生時代に作り上げた訳詩は、叙述的な部分こそ言葉を刈り込みつつ筋に従っているが、上に引いたように、いくつかの表現では原文を素材のレベルまで還元し、そしてデナムなりの詩想を働かせた上であらためて独自の二行連句を作り出している。「当訳の筆者に寄す」で褒め称えたように、デナムは "word by word" を拒絶し、"the effects of Poetry" を生み出そうとしていると言えよう。

さらに過去を見ると、デナムと同じ巻を訳したものに 1558 年のフェイア (Thomas Phayer c.1510-1560) 訳、1582 年のスタニハースト (Richard Stanyhurst 1547-1618) 訳、翻訳の自由を主張する 1620 年のロース (Thomas Wroth 1584-1672) 訳があるのだが、ここでは例としてスタニハースト訳の同箇所を引く。

[...] when that, with sudden, a thundring
 In the skye dyd rumble, foorth with their flamed a blazing
 Star, streams owt shooting, yeelding of cleerenes abundaunce.
 Wee noted yt glyding from tops of mansion houseplace.
 Lastlye the star sincking in woods wyde of Ida was hydden,
 Right the waye furth poincting. Thee wood with brightnes apeereeth.
 Eech path was fulsoom with sent of sulphurus orpyn. (Stanyhurst 1582: v.2, ll.692-698)

三者の訳に共通しているのは、いずれの訳詩の取る詩形も弱強七歩格であるだけでなく、原詩の行と訳詩の行を一致させていることだ。ラテン語の原詩は長短短六歩格で書かれているが、言葉を逐語的に追いかけてやると、ラテン語は文法や単語の面で短く簡潔であるから、英語に移す際にどうしても単語の数が増える。そこであくまでも行を合わせようやると、英語で一般的な五歩格の詩では音節の数が足りなくなってしまう。たとえば 1632 年に学生の便宜のため作られた五歩格のヴィカズ (John Vicars 1582-1652) 訳では、表現がすべて単純なものに要約され、文学的描写が台無しになってしまっているところも少なくない。むろん行にこだわらず逐語訳して韻文に当てはめていくという手段も取れなくはないが、その方法を選んだ 1547 年のサリー伯 (Henry Howard, Earl of Surrey 1517-1547) の訳は横でなく縦に延びたものとなっていた。そこでより長い七歩格が 16 世紀の中頃から訳詩で頻繁に用いられたわけだが、できあがる翻訳は原文の外形を伝えこそすれ、どうしても間延びした印象の否めないものとなる。これをデナムの「当訳の筆者に寄す」に重ねて読み替えるなら、"line by line" というやり方を "unhappy Rimes" である七歩格で行えば、ラテン語原詩にあるはずの "the nerves of his compacted strength" は締まりのないものへと変容させられてしまう、ということになる。

本来ならファンション訳と初訳のあいだに成立しなければならない関係を、学生時代のデナム

の試訳と旧訳のあいだとして、つまりデナムの呼びかけている相手が筆者本人であると考えて「当訳の筆者に寄す」を読むと、先の関係にあった違和感はほとんどなくなる。デナムが "that servile path" を見たのは『アエネーイス』の旧訳のうちであろうし、そこに詩歌の "pains" があると感じた。それまでの訳詩に言葉としての美しさや興味といったものはなく、炎ならぬ灰が残っているだけなのだ、とする表現は、デナムの『アエネーイス』翻訳の経験があつてこそだろう。ヘルガーソン (Richard Helgerson 1940-2008) は、素人詩人と区別して、人生を生きるための詩を書き、新奇なる芸術を目指しつつ国に関わる事々を改良する者たちを "Laureates" と呼び (1983: 29)、そして 1600 年から 18 年までに生まれた王党派詩人たちがまさにその "Laureates" であるとした (186)。1615 年生まれのデナムが、若い頃にただの詩人ではなく "Laureate" であろうとしたなら、言葉の美がないと感じたそれまでの『アエネーイス』翻訳を、〈英語詩〉に高めようと考へてもおかしくはない。単語ひとつひとつにこだわることで失われるものが訳詩に多々あるとすれば、原典をプロットと想念のレベルに戻してから、あらためて詩を作るというのも、ひとつの効果的翻訳方法であるかもしれない。だがそれでも問題なのは、当のデナムが翻訳の定めを振り払おうとしてまで作った訳詩がきわめて出来の悪いもので、若者の習作でしかなかった点だ。1636 年のデナム訳には消化不良や不徹底なところがかかり散見する上、想いばかりが先行して詩行がぎくしゃくしており、稚拙で意味の取れないところも少なくない (Sowerby 2010: 25, 33n., 34n., 44n., 56n., *et al.*)。

内戦当時の宮廷詩が、宮廷人同士の〈共感〉を旨とし、そして〈賞賛〉のために過剰な表現をも許容するものであったとするなら、そこにデナムが若き日の想いを込め、他人の翻訳へ仮託したのだということも、じゅうぶんありえるだろう。そして託されたのは、自らの理想に合った訳詩が作れなかったという、心の奥底にあったやりきれない気持ちであったかもしれない。つまりデナムは、自分に語るべきであったもの (そして語りえなかったもの) を、世辞として他人に投げかけたことになる。挫折と孤立が王党派詩人として詩を発露させる必要条件だとするなら (Helgerson 1983: 238)、前者を経験したデナムはそこへ近づきつつあったと言うべきだ。

4 『『トロイ陥落』序文』に至るまで

デナムはその後 1646 年に再度捕虜となりロンドンへ移されるが、移送中に取り入った議会派の大物のおかげで早期釈放の答申が出されたため、すぐに捕虜交換に出される予定だった。だが引渡場所が直前に陥落してしまい、代わりに積みもった負債を名目として再拘留されてしまう。デナムは法学院時代に培った知識を用いるとともに戦時の混乱を逆手にとって不当逮捕であると申し立て、その年の 5 月に放免されるやすぐさま債権者回避のために海外逃亡する。これがデナムの第一回目の亡命である (O Hehir 1968: 68-71)。

このときはまずチャネル諸島 (Channel Islands) にいた皇太子の周辺に合流したようで、デナムは暗号手紙のメッセンジャーとして活動しながら、1647 年 7 月には先に述べた議会派の大物

への伝手があるとして幽閉中の国王への接触をパリにいた王妃から請け負うこととなり、折衝役としてより高位の者の助けを借りながらも、その議会側の人物を通じて実際にカヴァーシャム城 (Caversham) の王へとたどり着いてしまう。ただしこのときの帰英は妻の死亡による遺産の受け取りを目論んだものともされている (O Hehir 1968: 71-75)。

ともかくもここでデナムは王の寵愛を受け、当時の側近のひとりとなるのだが、同年 11 月の王の逃亡計画に際して失敗の一因となり、暗号通信の仕事もついに暴露されて、1648 年には第二回目の亡命を喫することとなる。そこから合流したのは、王妃がおりまたカウリーなど見知った人物のいるパリのルーヴル派ではなく、やはり皇太子のいるハーグの派閥で、王が捕らえられ処刑されるまではスコットランドへ使者として赴き、戻ってからは再び暗号通信に携わりつつポーランドへ遣わされもした (O Hehir 1968: 75-80)。

ハーグではルーヴル派の文芸を揶揄するような詩をものしつつ、デナムは変わらず賭博にはまっていたようで、1653 年 3 月にはとうとう金が尽きて王党派から離脱し、護国卿体制に突入しようかというイングランドへ帰国する。当然ながら政府の取り調べを受け、結果として判明した負債のために、デナムはウィルトシャー (Wiltshire) にある政府側のペンブルク伯 (Philip Herbert, 5th Earl of Pembroke 1621-1669) の屋敷で監視下に置かれることとなった (O Hehir 1968: 83-99)。

伯爵の父が高名な文芸庇護者だったこともあってか、当時それなりに名のあったデナムは詩人として厚遇され、客人として伯とも親交を持ち、比較的落ち着いた日々を過ごしていたらしい。それに対してパリにいた王党派からは〈共和政府の詩人〉と罵倒もされたが、その汚名をそそぐためだったのか、それとも他に何もすることがなかったからか、この頃、デナムはかつて書いた『クーパーの丘』の本文と『アエネーイス』の翻訳の推敲改訂を始めている (O Hehir 1968: 99-102)。

しかし宮廷もなくなった今となつては、文芸という行為も以前のように出世の役に立つわけではない。当時刊行されていたかつての王党派の作品にしても、自負心または郷愁からなるものが多く、政治性を帯びていたとしても体制上自ずから限界もあった (Wilcher 2001: 310)。こういった状況下では書くこと・出版することは自分の意志以外にはありえず、捧げる相手もないため慣習的な献辞すらなくなってしまう。実際、数年後に出したデナムの詩や翻訳は誰にも捧げられていない。

そのようななかで、『アエネーイス』第二巻の部分訳として 1656 年に出される『トロイ陥落』の序文として、ひとつの翻訳論が書かれる。目指す翻訳の方向性としては、先の「当訳の著者に寄す」とさほど変わりがない。ただしその表現の仕方や言葉、問題意識がかなり違ってきている。その最たるものは、形式が詩から散文へと変化していることだろう。またむろん、考察の対象が他者（あるいは自己を仮託した他者）ではなく、自分自身と理想的翻訳者になっている。

そして表現面を考えてみると、「当訳の著者へ寄す」では、翻訳は高らかな道の話になっていた。才能あるものがどの道を選び行くのか、という形でたとえられていたのだが、「『トロイ陥落』序

文」ではうって変わり、喪失を目前にして訳者はどうするのか、というものになっている。絶対に消えてしまうものを前にして、自分は何をしなければならぬか、が課題となっているのである。

[I]t is not [the translator's] business alone to translate Language into Language, but Poesie into Poesie; and Poesie is of so subtle a spirit, that in pouring out of one Language into another, it will all evaporate; and if a new spirit be not added in the transfusion, there will remain nothing but a *Caput mortuum*, [...] (Denham 1656)

翻訳をふたつの碗における中身の移し替えに喩えること自体は、先の詩を捧げられたファンショー自身が『忠実な羊飼ひ』の献辞で述べていたが、以下に示すように消失や蒸発のメタファーは存在しなかった。

I am not ignorant (Sir) that this famous Dramatick Poem must have lost much of the life and quicknesse by being powred out of one vessell (that is, one Language) into another, besides what difference may be in the capacity and mettle of the Vessels themselves (the Italian being transcendently both copious and harmonious), and beside the unsteadinesse of the hand that powres it; (Fanshawe 1647)

あくまでも変化の話であって、うまく注ぎ入れ、こぼれなければよだけのこととされている。だがデナムの場合は、注ぐ以前に消えてなくなってしまうのだ。ここにあいだ10年を経て〈喪失〉が突然現れうる動機を考えてみたとき、まず思いつく背景としては君主(制)を失ったことがあるだろう。この『『トロイ陥落』序文』に現れる"evaporate"および"Caput mortuum"という用語はいずれも錬金術を彷彿とさせるが、共和制・護国卿体制時にあって錬金術はしばしば国王殺しのモチーフとして使われてもいた (Davis 2008: 38)。また化学的実験の残り滓を示す"Caput mortuum"の原義が〈しゃれこうべ〉を意味することは、デナムが翻訳『トロイ陥落』の最終カブレットで首のない王の死体に対して"king"-thingと韻を踏んでいることとも響き合う。さらに、数巻分にわたっていた『アエネーイス』の翻訳草稿から、デナムが〈トロイ陥落〉という国の滅亡を扱った箇所を取り上げて改訂出版した点を見ても、国と王の喪失を強く意識していたことがわかる。

さらにもうひとつの喪失は、文芸を受け入れる空間としての〈宮廷〉の消滅だろう。国における出世の手段としての文芸が、王党派が体制側でなくなったときに事実上なくなり、社交空間としての宮廷の存在価値がなくなれば、文芸も余技以下のものとなる。そして空間が瓦解すれば、そこで受け入れられていた文体や形式というものの価値もそれとともに失われる。それまで自分たちの文芸が拠っていたものがなくなってしまい、単に訳すだけで興として受け入れられていた

時代は終わることとなったのだ。

このふたつの喪失を前にしてデナムが取り組まなければいけないのは、二重の意味での翻訳だ。ひとつ目はラテン語から英語というカテゴリ間の移注であり、ふたつ目は推敲という行為によって過去の訳稿を失われた宮廷から何か別の空間へと移し替えることである。護国卿体制下のイングランドにおいて、かつての訳や詩行をそのまま出版したとして変化した文芸空間に受け入れられるものなのだろうか。この疑問に直面したデナムが、〈新しい詩想〉の必要性を無意識的にも感じたのなら、この翻訳論における喪失と創出のメタファーは必然のものとなる。

5 自立した作品へ向かう萌芽

蒸発した詩想を目の前にして、訳詩を作ろうとする者は何をすべきか。デナムによれば、捨てるべきあり方は〈忠実な仲介者〉を気取ることとされる。

I conceive it a vulgar error in translating Poets, to affect being *Fidus Interpres*; (Denham 1656)

もちろんこの言葉の背景には、キケロー (Marcus Tullius Cicero 106 BCE-43 BCE) やホラーティウス (Quintus Horatius Flaccus 65 BCE-8 BCE) があり、"Nec converti ut *Interpres*, sed ut *Orator* [われは仲介する者ならず雄弁なる者のごとく翻せり]" (Cicero 1949: 364)、"Nec verbum verbo curabis reddere, *fidus / Interpres*" (Horace 1929: ll.133-134) という一節がそれぞれよく引用される。語句が一致するため、デナムはとりわけホラーティウスを意識していたと見ていいだろうが、この有名な引用句だけでは考察にあたってかなりの問題が生じる。なぜならこの部分だけなら単なる禁止の文に見えるが、実は "*publica materies privati iuris erit, si*" (Horace 1929: ll.131) から続く、複数の条件節のひとつだからであり、全体を見なければデナムの言わんとすることが見えてこないからである。

そもそもこの詩行の含まれるホラーティウス『詩論』(*Ars Poetica*, c.18 BCE) は書簡詩として書かれ、よい詩を書くにはどうすればいいか、などが記されたものだ。デナムの引いた "*Fidus Interpres*" という言葉が現れるのは題材の扱い方について述べられたあたりで、"*publica materies*" を自分のものにするための条件として "*Fidus Interpres*" が禁止されている。この "*publica materies*" は、現在の創造論ならば〈パブリック・ドメイン〉と呼ばれるべきもので、知的創造のために使える共有財産・誰のものでもある創作の源泉としての〈作品〉に当たる。ホラーティウスの執筆当時では、特にホメーロス (Ἡρόδοτος c.8th century BCE) やその叙事詩のことであり、一般に膾炙した有名作品から部分的な場面やテーマや人物を借りて個々の詩作などがなされた。その際、言葉を一語ずつ引き写しては新しい詩が作れず、題材として自分のなかで消化できないと、ホラーティウスはこの一節で戒めているのである。この詩作のあり方は〈翻案〉に近い上に、元の詩を題材にして新しい詩を作るという姿勢は、学生時代から改稿時に至るまで

デナムが『アエネーイス』という詩に対して一貫して取り続けた態度とも一致する。つまりは、翻訳にあたってデナムが常にホラーティウスの詩論を念頭に置いており、先に引用した箇所は原典を "publica materies" ととらえよ、ということにもなるだろう。

そしてこの "Interpres" を現代風に〈解釈者・翻訳者・通訳者〉といった転義で即断してはならない。原義は "An agent between two parties, a broker, factor, negociator" (Lewis and Short 1879: 984) であり、比喩的にキケローが比較しホラーティウスが念頭に置くのはこのあり方だからだ。そしてこの〈仲介者〉という役割は、デナムが王党派で担っていた仕事とそのまま重なり合う。瓦解しつつある宮廷内において、暗号伝令の義務は二者間のメッセージを一言一句間違わずに伝えることにあり、使者のそれも主の意向を正しく伝えることにあった。だが翻訳『トロイ陥落』の先にあるのは宮廷ではない。現在であり、あるいは英語そのものであり、その翻訳姿勢は時代への迎合という形でも現れる。

And as speech is the apparel of our thoughts, so are there certain Garbs & Modes of speaking, w^{ch} vary with the times; the fashion of our clothes being not more subject to alteration, then that of our speech: and this I think *Tacitus* means, by that w^{ch} he calls *Sermonem temporis istius auribus accommodatum*; the delight of change being as due to the curiosity of the ear, as of the eye; and therefore if *Virgil* must needs speak English, it were fit he should speak not only as a man of this Nation, but as a man of this age; (Denham 1656)

世が変われば言葉が変わり、求められる文体も異なってくる。デナムが〈耳に合ったそのときの表現 *Sermonem temporis istius auribus accommodatum*〉を、言葉だけでなく国や時代をも明確に意識して持ち出すとき、その態度はただ現著者に英語をしゃべらせるとするよりもさらに自己へ引き寄せるものとなっている。諸氏の説にある通り、デナムはペンブルク伯邸で作品を通じて自らの置かれた現状と向き合っていたと言えよう (Miner 1971: 166-168; Wilcher 2001: 339-340)。

そして当の『トロイ陥落』ではかつてあった表現の直接性・過剰性が削がれ、訳詩は穏やかさを湛えたものとなっている。『クーパーの丘』の有名な詩行が内戦前と後で "O could my verse freely and smoothly flow, / As thy pure flood, heav'n should no longer know / Her old Eridanus, thy purer streame / Should bathe the gods, and be the Poets Theame." (Denham 1642: ll.219-222, 下線部筆者) から "O could I flow like thee, and make thy streame / My great example, as it is my theme! / Though deep, yet cleare, though Gentle, yet not dull, / Strong without rage, without 'ore-flowing full." (Denham 1655: ll.189-192, 下線部筆者) へと明確な変化を示したように、翻訳『トロイ陥落』は原文の 558 行から訳文の 549 行と総行数はむしろ少なくなっている上、草稿と改稿のあいだでも表現にかなりの差異が見られる。たとえば原典では「[われわれは櫓を] 最上層が／弱い継ぎ目を示すところで、深い土台から引き抜き、／押し出した。突如それは雪崩のように崩れると、／轟音とともに滑りながら、ダナイ人の隊列の上に広く／落ちかかった。」(岡・高橋

2001: ll.463-467) という内容にあたる詩行が、以下のように改められている。

This, where the joints and strongest beams did meet,
 We brake and tear asunder, which on all
 The Grecians with a thund'ring noise did fall. (Denham 1636: v.2, ll.378-380)

This, where the Beams upon the Columns meet,
 We loosen, which like Thunder from the Cloud
 Breaks on their heads, as sudden and as loud. (Denham 1656: ll.451-453)

[...] qua summa labantis
 iuncturas tabulata dabant, conuellimus altis
 sedibus impulimusque ; ea lapsa repente ruinam
 cum sonitu trahit et Danaum super agmina late
 incidit. [...] (Mynors 1969: v.2, ll.463-467)

破壊による硬く重い物の落下と殺傷は、天井のバランスを崩したことからくる突然の轟音と結果の示唆のみとなり、韻も "all"- "fall" から "Cloud"- "loud" と直接的な動きから感覚に訴えかける方へと向かっている。原詩のどの要素を取り出すかで訳詩が変わってくる一例だ。

翻訳『トロイ陥落』の全体を見ても、フランスの影響と言えるほど過剰な流麗さへの追求はなく、デナムがダブランクール流の翻訳を追いかけているとは思えない。またデナムを流暢な翻訳でもってエリート層の文学規範を維持・強化する者と見る説もあるが (Venuti 1998: 241 *et al.*)、実際には宮廷に親和的なかつての表現法は、上で引いたような改訂によって訳詩から消えている。むしろその説に対して以下の文を引いて異議を唱える言い分の方に説得力があるのではないだろうか (Hopkins 2005: 57)。

[T]here [are] certain Graces and Happinesses peculiar to every Language, which gives life and energy to the words; (Denham 1656)

そして、デナムが自国語の言葉そのものの力強さ・美しさを引き出そうとしたのだとすれば、彼に始まる王党派の翻訳が〈新しい〉とされたのは英語の潜在力が高まったように見えたからだとする説にも肯首できるだろう (Weissbort 2001: 91)。この改稿では意味が明確になり、さらに表現がある種の粗野なものから優雅さへと近づいている。むろん100年ほどあとのジョンソン (Samuel Johnson 1709-1784) からすれば、粗が透けて見える程度のものであるのだが (1779: 240-241)。

ただしこの変化がデナム個人の積極的なものと言い切れるかどうかは難しい。彼はこの序文の冒頭に唐突に翻訳行為のことを "travel" と呼ぶ。ここでの意味は原義の "travail" に近いが、そこから離れた二段落目の半ばあたりで今度は転義寄りの "traveller" という単語が現れる。

[W]hosoever offers at Verbal Translation, shall have the misfortune of that young Traveller, who lost his own language abroad, and brought home no other instead of it; (Denham 1656)

この箇所では語られるのは流浪する異邦人としての言葉の喪失であるが、これは旅したものが余儀なくされる類のものである。旅とは困難なものであり、ゆえに責め苦や無理の "travail" が "travel" となる。先に掲げた『クーバーの丘』の推敲箇所では、〈自由に滑らかに流れる〉から〈力強くも波はなく溢れずに充ち満ちる〉へと、同じ川の模倣でも目指す詩の表現のあり方が変わっていたが、デナム自身の状況を考え合わせると、詩想や表現がそもそも溢れていないのではなく、亡命や喪失を経て詩人自身が自由に溢れさせられなくなったのではないかと解釈することもできよう。

17世紀半ばに至って、翻訳は同世紀初頭のように手本でもなければ社交でも興でもなくなり、詩の可能性を追求する媒体となりつつあった。このときの詩人にとって亡命によって与えられる挫折と孤立がそのために必要だとするなら、パリやハーグにいた王党派は本当の意味での異邦人ではないがゆえに "Laureates" にはなりきれない。なぜなら所属するものがあるからで、詩人は既存の文体を確保しえるからだ。とすれば、宮廷を離れて "no-state's poet" (Davis 2008: 39) になるよう強いられたデナムにこそ、むしろ "Laureates" になりうる資格と蓋然性があるのだろう。そして「当訳の筆者に寄す」と『トロイ陥落』序文を、『アエネーイス』の翻訳という行為を通じて、若く何もなくあった頃のデナムと頼りとする所属のない中年のデナムをそれぞれ結びつけてみると、この詩人の置かれた立場や詩作の動機が重なって見えてくる。いずれの時期のデナムにも拠るべき外部がないのである。それでも学生のデナムには目指すべき宮廷があったが、中年のデナムには何もないため将来すら見えなかったことだろう。人に頼るものがなければ作品も同様で、文芸は何もないところで著者と向き合い、ささやかに自立しようとするしかない。そのためには文芸のなかへ自己の魂や詩想を込めるしかなくなる。それだけが詩人と作品の唯一拠るべきものだからだ。

独立した詩想や精神といったものが、社交や追従から離れ、印刷という媒体を通じてその向こうにある公共圏 (Norbrook 1999: 13; Wilcher 2001: 3) や集団的パトロン (Saunders 1964: 54-55) と結びつくと、近代的な作品のあり方まで、あと少しのところまで来たと言える。それは同時に、大量印刷と広汎な読者によって支えられた18世紀英国の古典主義時代の文芸を予感させるものでもある。ただし1660年には王政が復古し、宮廷という文芸空間も旧に復すこととなる。だが一度失った勢いは取り戻しようもなく、世紀の終わりへ向かうにつれて、宮廷文芸というシステムそのものが衰退していく (Saunders 1964: 92)。内戦期と空位期を生き抜いた王党派にはもは

や "Laureates" のような文芸への真摯な意識が失われており (Helgerson 1983: 241)、ステイグマのなくなった印刷は宮廷とは関係なく文芸とともに自立の道を進んでいく。そしてデナム自身も復古に際して論功行賞を得、安定した地位についてしまったために余技以外では文芸に取り組みなくなった。晩年のデナムの詩心は萎み、結果として T・S・エリオット (Thomas Stearns Eliot 1888-1965) の言葉通り「がらくた」しか作らなくなる (1928: 501)。

オヘア (Brendan O Hehir 1927-1991) が書いたデナムの伝記では、詩人としてもっとも実りのあった時期のひとつをペンブルク伯邸滞在中としているが (1968: 99)、そのことを疑う人はいないだろう。そして、そこに同じく『クーバーの丘』執筆と『アエネーイス』訳に取り組んだ若き日のデナムを加えてもきっと許されよう。詩人としてのデナムはそのふたつの時期においてのみ、ほんの少しだけ輝き、その熱はふたつの翻訳論に強くとどめられている。

引用・参考文献

- Addison, Joseph, Richard Steele and et al. (1713/1714) "No 164. Friday, September 18", *The Guardian*, London: Tonson, 440-444.
- Amos, Flora Ross (1920/1973) *Early Theories of Translation*, New York: Octagon Books.
- Banks, Theodore Howard [ed.] (1928/1969) *The Poetical Works of John Denham*, 2nd ed., North Haven: Archon Books.
- Bassnett, Susan (1980/2002) *Translation Studies*, 3rd ed., New York: Routledge.
- Bennet, H. S. (1970) *English Books and Readers 1603 to 1640: Being a Study in the History of the Book Trade in the Reign of James I and Charles I*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Berry, Herbert (1971) "Review of *Harmony from Discords*", *Renaissance Quarterly*, 24 (3): 414-419.
- (1974) "Sir John Denham at Law", *Modern Philology*, 71 (3): 266-276.
- Boutcher, Warren (2001) "The Renaissance", *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 45-55.
- Brooks, Harold F. (1949) "The 'Imitation' in English Poetry, especially in Formal Satire, before the Age of Pope", *The Review of English Studies*, 25 (98): 124-140.
- Caldwell, Tanya (2004) "Dryden and Denham", *Texas Studies in Literature & Language*, 46 (1): 49-72.
- Carson, Anne Elizabeth (2005) "The Hunted Stag and the Beheaded King", *Studies in English Literature 1500-1900*, 45 (3): 537-556.
- Cicero (1949) "De Optimo Genere Oratorum", *Cicero II (Loeb Classical Library)*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 387-373.
- Davidson, Peter (2004) "Fanshawe, Sir Richard", *Oxford Dictionary of National Biography*, v.19, Oxford: Oxford University Press, 20-23.
- Davis, Paul (2008) *Translation and the Poet's Life: the Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*, Oxford: Oxford University Press.
- De Groot, Jerome (2004) *Royalist Identities*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- (2008) "John Denham and Lucy Hutchinson's Commonplace Book", *Studies in English Literature 1500-1900*, 48 (1): 147-163.

- Denham, John [tr.] (1636/2010) "Aeneid: The 1636 Version", *Early Augustan Virgil*, Lewisburg: Bucknell University Press, 23-117.
- (1642a) *Coopers Hill: A Poeme*, s.l.: s.n.
- (1642b) *The Sophy*, London: Walkley.
- (1647) "To the Author of this Translation", in Richard Fanshawe [tr.] *Il Pastor Fido, The Faithfull Shepherd: a Pastorall*, London: Raworth.
- (1650) "To Mr. Richard Fanshaw Esq; upon his Ingenuous Translation of *Pastor-Fido* into English", *Coopers Hill: A Poeme*, 2nd ed., London: Moseley, 21-22.
- (1651) *The Anatomy of Play*, London: Bourne.
- (1655) *Coopers Hill: Written in the Yeare 1640. Now Printed from a Perfect Copy; and a Corrected Impression*, London: Moseley.
- [tr.] (1656) *The Destruction of Troy, an Essay upon the Second Book of Virgils Æneis. Written in the Year, 1636*, London: Moseley.
- (1664) "To the Author of this Translation", in Richard Fanshawe [tr.] *Il Pastor Fido, The Faithfull Shepheard*, London: Moseley.
- (1668a) "To the King", *Poems and Translations with the Sophy*, London: Herringman.
- (1668b) "To Sir Richard Fanshaw upon his Translation of *Pastor Fido*", *Poems and Translations with the Sophy*, London: Herringman, 119-121.
- Dryden, John (1680/1980) "Preface to the Translation of Ovid's Epistles", in Isao SATO [ed.] *John Dryden's Theory of Translation*, Tokyo: Hokuseidō Shoten, 3-9.
- Dymock, a kinsman of Edward [tr.] (1602) *Il Pastor Fido: or The Faithfull Shepherd*, London: Waterson.
- Eliot, T. S. (1928) "John Denham", *Times Literary Supplement*, 5 July 1928: 501.
- (1930) "The Minor Metaphysicals From Cowley to Dryden", *The Listener*, 3 (65): 641-2.
- Ellis, Roger and Liz Oakley-Brown (1998) "British Tradition", *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London: Routledge, 333-343.
- Fanshawe, Richard [tr.] (1647) *Il Pastor Fido, The Faithfull Shepherd: a Pastorall*, London: Raworth.
- Francklin, Thomas (1753) *Translation; A Poem*, London: Francklin.
- Guarini, Giovanni Battista (1615) *Il Pastor Fido: Tragicomedia Pastorale*, Venezia: Zalcieri.
- Helgerson, Richard (1983) *Self-Crowned Laureates: Spencer, Jonson, Milton and the Literary System*, Berkeley: University of California Press.
- Hermans, Theo (1999/2004) *Translating in Systems: Descriptive and System-oriented Approaches Explained*. Shanghai: SFLEP.
- Hill, Christopher (1955) *The English Revolution 1640: An Essay*, London: Lawrence and Wishart.
- (1985) *Writing and Revolution in 17th Century England*, Brighton: Harvester Press.
- (1990) *A Nation of Change and Novelty: Radical Politics, Religion and Literature in Seventeenth Century England*, London: Routledge.
- Hopkins, David (2005) "Dryden and his Contemporaries", *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 56-66.
- Horace (1929) "Ars Poetica", *Horace (Loeb Classical Library)*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 442-489.
- Howard, Henry [tr.] (1547/1963) *The Aeneid of Henry Howard, Earl of Surrey*, Berkeley: University of California Press.

- Johnson, Samuel (1759/1975) "*The Idler*, Nos. 68, 69", *English Translation Theory, 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum, 117-121.
- (1779/2006) *Lives of the English Poets*, Oxford: Clarendon Press.
- Kelliher, W. Hilton (1971) "Review of *Harmony from Discords*", *Review of English Studies*, 22 (85): 79-81.
- (1986) "John Denham: New Letter and Documents", *British Library Journal*, 12: 1-20.
- (2004) "Denham, Sir John", *Oxford Dictionary of National Biography*, v.15, Oxford: Oxford University Press, 775-778.
- Kelly, Louis (2005a) "The Eighteenth Century to Tytler", *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 67-78.
- (2005b) "Francklin, Thomas", *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 522.
- Lewis, Charlton T. and Charles Short (1879/1975) *A Latin Dictionary Founded on Andrew's Edition of Freund's Latin Dictionary Revised, Enlarged, and in Great part Rewritten*, London: Oxford University Press.
- Lipking, Lawrence (1970) *The Ordering of the Arts: in Eighteenth-Century England*, Princeton: Princeton University Press.
- Marcus, Leah S. (1994) "Politics and Pastoral: Writing the Court", *Culture and Politics in Early Stuart England*, Basingstoke: Macmillan Press.
- May, Thomas [tr.] (1628) *Virgil's Georgicks*, London: Walkley.
- [tr.] (1631) *Lucans Pharsalia: or the Ciuill Warres of Rome, betweene Pompey the great, and Iulius Caesar*, London: Iones.
- Mercer, M. J. (2004) "Francklin, Thomas", *Oxford Dictionary of National Biography*, v.20, Oxford: Oxford University Press, 753-754.
- Miner, Earl (1971) *The Cavalier Mode from Jonson to Cotton*, Princeton: Princeton University Press.
- Mynors, R. A. B. [ed.] (1969) *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford: Oxford University Press.
- Nabokov, Vladimir (1959) "The Servile Path", *On Translation*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 97-110.
- Nida, Eugene (1970/2004) *Towards a Science of Translating*, Shanghai: SFLEP.
- Norbrook, David (1994) "Lucan, Thomas May, and the Creation of Republican Literary Culture", *Culture and Politics in Early Stuart England*, Basingstoke: Macmillan Press, 45-66.
- (1999) *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627-1660*, Cambridge: Cambridge University Press.
- O Hehir, Brendan (1968) *Harmony from Discords: a Life of Sir John Denham*, Berkeley: University of California Press.
- (1969) *Expans'd Hieroglyphicks: A Critical Edition of Sir John Denham's Coopers Hill*, Berkeley: University of California Press.
- O'Sullivan Jr., Maurice J. (1980) "Dryden's Theory of Translation", *Neophilologus*, 64 (1): 144-159.
- Parker, Roger (1994) *The Oxford Illustrated History of Opera*, Oxford: Oxford University Press.
- Phayer, Thomas [tr.] (1558) *The Seuen First Bookes of the Eneidos of Virgill Conuerted in Englishe Meter*, London: Iugge.
- Reiner, Frederick (1989) *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*, Amsterdam: Rodopi.
- Robinson, Douglas [ed.] (1997/2002) *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, 2nd ed.,

- Manchester: St. Jerome Publishing.
- Sandys, George [tr.] (1628) *Ovid's Metamorphosis*, London: Grismond.
- Saunders, J. W. (1964) *The Profession of English Letters*, London: Routledge.
- Smith, F. Seymour (1930) *The Classics in Translation: An Annotated Guide to the Best Translations of the Greek and Latin Classics into English*, London: Charles Scribner's Son.
- Sowerby, Robin Edward (2010) *Early Augustan Virgil*, Lewisburg: Bucknell University Press.
- Stanyhurst, Richard [tr.] (1582) *Three First Foure Bookes of Virgil: His Aeneis Translated intoo English Heroical Verse*, Leiden: Pates.
- Steiner, George (1975/1998) *After Babel: Aspects of Language and Translation*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, T. R. (1975) *English Translation Theory, 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum.
- Trevor-Roper, H. R. (1953) "The Gentry 1540-1640", *Economic history review, Supplements 1*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (1965) "The General Crisis of the Seventeenth Century", *Crisis in Europe 1560-1660: Essays from Past and Present*, London: Routledge.
- Tytler, Alexander Fraser (1813/1978) *Essay on the Principles of Translation*, Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, Lawrence (1993a) "The Destruction of Troy: Translation and Royalist Cultural Politics in the Interregnum", *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 23 (2): 197-219.
- (1993b) "Translation as Cultural Politics: Regimes of Domestication in English", *Textual Practice*, 7 (2): 208-23.
- (1995/2008) *The Translator's Invisibility: a History of Translation*, 2nd ed., New York: Routledge.
- (1998) "Strategies of translation", *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London: Routledge, 240-244.
- (2001) "Neoclassicism and Enlightenment", *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 55-64.
- Vicars, John [tr.] (1632) *The XII Aeneids of Virgil, the Most Renowned Laureat-Prince of Latine-Poets; Translated into English Deca-Syllables*, London: Alsop.
- Weissbort, Daniel (2001) "Poetry", *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 89-96.
- and Astradur Eysteinnsson [ed.] (2006) *Translation - Theory and Practice: A Historical Reader*, Oxford University Press.
- Wilcher, Robert (2001) *The Writing of Royalism, 1628-1660*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wroth, Thomas [tr.] (1620) *The Destruction of Troy, or the Acts of Aeneas*, London: Nicholas.
- 岡道男・高橋宏幸 [訳] (2001) 『アエネーイス』 京都大学学術出版会
- 佐藤勇夫 (1981) 『坪内逍遙におけるドライデン受容の研究——東洋と西洋における比較文学の原点』 北星堂書店